

入試雑感

本年度の入試問題について、たくさんの方に問題に直接触れている編集委員が率直な感想を述べる。

(太字の出典は、本問題集に採録)

古文

今年度入試は、新課程を学んだ高校生が初めて受験する入試であるとともに、共通テストの国語において大問の配点変更により古典の比重が減少し、各大学が古典をどのように扱うかが注目される入試であった。

そうしたなか、『撰集抄』^⑩東京大は新課程入試の古典における一つの典型を示したといえよう。物語の内容をたどりやすい、比較的平易な文章を出題しつつも、和歌を含めた内容の正確な読み取りや、抽象的な問いに対する確かな解答を求めている。『海道記』^⑥北海道大や『増鏡』^⑬名古屋大も、歴史上の出来事を回想する形式で読み取りやすい。受験生が一度は触れたことがあるであろう作品からの出題が目立つのも、同じ意図によるものかもしれない。たとえば『更級日記』^②神戸大は有名箇所からの出題であるし、『玉勝間』^⑪大阪大では『伊勢物語』の「東下り」と関連させた出題をしている。『無名草子』^⑧(岐阜大)も有名箇所からの出題であった。

これに対して、難度の高い問題や和歌の深い読解を求めるのが、新課程入試の古典のもう一つの傾向かと思われる。『源氏物語』^⑪東北大は昨年度と比べて明らかに難化した。香川大でも『源氏物語』が出題されており、これは「古典を出題する大学を受ける以上は、このレベルの文章を読解できる力をつけておいてほしい」という大学の主張の表れかと思われる。あるいは『紫式部日記』^⑨鹿児島大も含め、大河ドラマを視聴してそれなりの知識を得ていることを期待しての出題かもしれない。また、歌論や和歌の解釈の出題も目立つ。『正徹物語』^①名古屋大・福島大、『貝合』^④広島大、『うたたね』^⑨九州大、『浜松中納言物語』^⑫佐賀大、『落窪物語』^⑭愛知県立大など、掛詞をはじめとする和歌の修辞を踏まえた和歌の解釈が出題されている。

さらに呼応の副詞や、助動詞の文法的意味を問う基礎的な問題も見られ、日頃から地道に学習を重ね、知識を確実に定着させることがいかに大切であるかが痛感させられる。作品の文学史的位置づけや背景なども含め、普段から心がけて勉強してほしい。

漢文

本文の分量は一部の大学を除き、一ページ程度に収まっている。内容の易化は落着きを見せた。本文とその注からの出題『三国志・三国志注』^⑳九州大や『史記・李義山詩集・詩人玉屑』^㉑佐賀大など、複数の文章を並べた問題は昨年よりも少なくなった。

出題は句法・用法が手がりとなるものが多いが、出題箇所(傍線部)で直接問われていなくても、解答には句法の知識が必要な場合もある。再読文字は頻出であるので必ず習得しておくこと。反語や使役だけでなく、二重否定、仮定、限定、比較、選択、比況、抑揚など幅広く出題された。また書き下しや口語訳とともに「豈」^①如「如」^②などの読みもよく問われている。ほかには「於」「雖」「所以」「乃・輒」^③の読みも出題された。難関大では句法の知識を前提として、さらに文脈を踏まえて考えさせる問題も多いので、漢文を読み慣れておくこと。

記述の量については、名古屋大で一五〇字の記述があり、ほかにも七〇〜八〇字前後で記述させる大学も多く、まとめる力が試される。また、傍線部の説明を求める問題であっても本文全体を踏まえて書くべき場合もあり、どこまでまとめるかを判断する必要がある。もちろん、本文だけでなくリード文や注は解答のヒントになるので必ず読み、理解の助けとしたい。対句的な表現にも注目すること。とくに中国独特の文化が関わる問題は、リード文や注をよく読む必要がある。ジャンルについて、『随筆・評論』にあたるものは、『竹窓二筆』^㉒(東京大)や『香雪録提要』^㉓名古屋大などが出題された。日本漢文は『先哲叢談』^㉔新潟大、『近古史談』^㉕鹿児島大が出題されている。諸子百家など「思想」にあたる文章は、『韓非子』^㉖(お茶の水大・熊本大)や、『論衡』^㉗(大阪公立大)など複数出題された。詩は『白氏文集』^㉘岡山大から出題されたが、全体の傾向としては少なかった。ただ、押韻や対句、詩の構成など、詩の基本事項は解釈のヒントともなるので確認しておくこと。『歴史』は前出の『三国志』や『史記』のほか、『戦国策』^㉙岐阜大、『隋書』^㉚神戸大など多くの出題があり、『説話的文章』も『説苑』^㉛広島大・大阪大、『述異記』^㉜北海道大、『履園叢話』^㉝東北大など多数出題された。総じて評論などの論理的な文章よりも、説話集に加え、歴史や思想、日本漢文でも物語要素のある文章が多いことが今年の傾向であった。